桜色薔薇

ユカリ☆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
桜色薔薇

【Ｎコード】
Ｎ５０４６Ｋ

【作者名】
ユカリ☆

【あらすじ】
神様・・・どうして私は、あの人に出会ってしまったのでしょうか。
仇の息子とは知らずに愛してしまった少女サリーナ。
彼女の選択は・・・

プロローグ（前書き）

初のファンタジーなのでおかしな点も有ると思います。
自己の判断でお読み下さい。
また、作者の造語も入っていますのでお気をつけ下さい。

プロローグ

遥か昔ブロッサムローズ（桜色薔薇）国には、同じ名前の淡いピンク色の薔薇の花があった。
桜色薔薇は、昼間は太陽の温かな光に守られ、夜は月の穏やかな光に守られながら決して枯れる事無く、王宮の中央ブロッサムガーデンに咲き誇っていた。
人々は桜色薔薇を神の花と奉り、敬った。太陽と月の加護を受け、災害等に見舞われること無く、平和に暮らしていた。

ある時桜色薔薇の話を聞いた隣国の王は、その薔薇を奪うためブロッサムローズ国に攻め込んで来た。しかしブロッサムローズ国は、平和が長年続いた事もありまともに戦える者がほとんどいなかった。
（もう駄目だ！）皆がそう思った。その時、桜色薔薇がまばゆく光り輝いた。その眩しいほどの光は、ブ国を覆い包み込んだ。
光が収まった後、目を開けると敵兵の姿もブロッサムガーデンに咲いていた桜色薔薇も消えていた。
ただ…桜色薔薇があった場所には、そのバラと同じ色の雫石が落ちていたと言う。
何が起こったか分からなかったが、人々はそれを桜色薔薇の奇跡だと信じた。

平和を取り戻したブロッサムローズ国は、その石に“桜色薔薇石（ブロッサムローズセキ）”と名付け代々王家の家宝として今も伝えられている。

過去～ひとつの終焉～

―１２年前―

「陛下！ここはもう駄目です！！早く逃げ下さい。」

甲冑には夥しい血を浴び、肩に何本もの矢が刺さっていた青年が、足を引き摺りながらも必死に王の下へ行く。

誰もが気軽に来られるようにと作られた小さなお城は、すでに火が放たれた。炎は一瞬で燃え上がり、暗い夜空を空が茜色に染めた。それはまるで、この城の終焉を表しているかのように・・・。

城外や玉座の間以外の部屋からは、互いの兵士の剣の交わる音と「王を守れ！！」「ここから先は、何人も通さん！！」そう叫ぶ自国の兵士達と「王を捕まえろ。」「皆殺しにしてしまえ。」等と叫ぶ敵国の兵士の声が響いていた。

玉座に座り、目を閉じていた王は隣で不安そうに様子を見ていた妻と幼い娘に一度視線を移した後青年へ視線を向けた。

「レイル。良くここまでこの国を守ってくれた。感謝する。だが、私はこの国の王だ。外で戦っている兵や民を残して逃げることは出来ない。」

真っ直ぐ青年を見つめ、王は

「何を言っているのですか！！　あなた様が居なくなったら、誰がこの国を導くのですか！！！さぁ、「レイル・・・・もう決めた事だ。王妃も分かってくれている。」

「王妃！！」

そう叫び、青年は王の傍らにいる王妃に視線を向けた。

王妃は、痛みを堪える様に強く瞳を閉じ、静かに青年に告げた。

「この人は王です。王は民を守るためにいます。そして何よりこの人は、この国をこの国の人々を愛しています。そんな人が愛している者を置いて逃げる事など出来るはずありません。それは、私とて同じ事。私も王と共にここに残ります・・・」

王妃は閉じていた瞳を開け、自分の蒼いドレスの裾にしがみつく娘にそっと手を置き言葉を続けた。
「レイル。貴方に御願いが有ります。この子・・・サリーナを・・・どうか」
そう言いながら王妃は娘を強く抱きしめた。
「王妃・・・」
そんな光景を見ながら、青年は呟く。
「おかあさま。どうなさったの？どこかいたいの？」
娘は、心配そうに王妃を抱き返した。
「さあ、炎が回らぬうちに」
王が言いながら、立ち上がり、玉座を強く押した。
すると・・・
ゴゴゴゴっと玉座が横に動き、玉座があった場所からは、階段の入り口が現れた。
「ここは代々王にのみ伝えられている隠し通路だ。これで城外に抜けられる。城を抜けたら、カザドの町へ行け。カザドの町で、エルという者に会うのだ。後のことは、その者に伝えている。レイル・・・娘を・・・サリーナを頼んだぞ。」
そう言うと、王妃から娘を抱き取り青年に娘を託した。
「おとうさま？おかあさま？」
青年に抱き上げられた娘は、何が何だか分からず、父と母の顔を交互に見ていた。
「サリーナ。これから父と母は、あなたの側にいてあげられる事が出来ません。でも父とは母は、何時までもあなたを見守っていますよ。どうか幸せに生きてね。」
涙ぐみながら、母は、娘に言った。そしてチャラっと自身の首に架かっていた首飾りを外し、娘の首に架けた。
「レイル、後を頼みます。」
そう青年に視線を向け言うと、隠し通路へ促した。
青年が隠し通路の階段を降りようと足を出したその時、

バンッ！
玉座の間の扉が開かれた。
「サリーナ・・・幸せになるのだぞ。」
「王がいたぞ！！」「王、お逃げ下さい！」「観念しろ！」
自国の兵士が必死に敵兵をこれ以上侵入させまいと立ち向かっていった。
しかし、自国の兵は、1人また1人と数を減らしていく。
その間にも敵の兵は増えていった。「早く！早く行くのだ！！レイル、娘を、娘を頼んだぞ！！」
ドンと青年を押し、通路の中へ押し込む。
ゴゴゴゴっと通路の扉が閉まっていく。しまっていく扉の中で、穏やかにこちらを見つめる王と王妃。
そんな二人を見て、
「おとうさま！おかあさま！！イヤッ！！サリーナもいっしょにいる！！」
そう泣き、青年の腕から逃れようと懸命にもがく。
青年は、娘を放すまいと強く抱き歯を食いしばりながら通路を抜けって行った。
その後、城は焼け落ち、王と王妃の遺体が見つかる。
二人は、互いに抱き合いながら亡くなっていたと言う。
それが、祝福の国ブロッサムローズの最後だった。
　王と王妃の4歳になる第一皇女サリーナ姫と国宝「桜薔薇石」は、どこにも見つからなかった。

日常

（あれから１２年か・・。）
食堂の開店に向けて、テーブルを綺麗に拭きながらサリーナは思った。
私はまだ幼かった為、余り覚えていない。覚えているのは、燃え上がる城と両親の最後の言葉と悲しそうな顔。そして、大好きな母から架けてもらった首飾りぐらいだ。
１２年前城から逃げ延びた後、レイルは泣きじゃくる私を連れて、父の言われた通りガルドの町向かった。ガルドの町は、王都から５キロほど北にあるに町だ。
１２年前の戦争では、王都から少し離れていたこともあって被害は少なかったそうだ。
エルさんは、ブルーム食堂を一人で切り盛りしている女主人だった。小柄なのに腕っ節はピカイチ！
とても気さくな人で、この町の人からとても頼りにされている。
父とはちょっとした縁で友人となったそうで、何かの時には・・・と手紙と必要な物品等を預かっていたという。まさか自分の友人が国王で、死んじゃうとわね・・・とお酒を飲みながら悲しそうに話してくれて事があった。
父の手紙には、敵討ちなど考えず幸せに暮らして欲しい旨と祖国の民が幸せに暮らせる様支えて欲しい。そう書かれていたそうです。始めは納得のいかない様子のレイルも時が経つにつれ私を立派に育てる事でお父様たちの遺志に従うことにしたと言う。
　エルさんは、行く当ての無かった私たち２人を迎え入れてくれた。
「よしっ！」テーブルを全て拭き終えると、厨房で仕込みをしているエルさんに声をかけた。
「エルさん、テーブル拭き終わりましたよ。」
「じゃあ、レイルに声掛けて店を開けますか。」

「は～い。」
バタバタと扉に向かうと、
「サナ。髪！髪！」
エルさんはそう言いながら、金髪のウィッグを私に持ってきてくれた。
私の髪は銀髪で、この辺りの国ではブロッサムローズ国の王族だけしかこの髪はいない。

だから普段はウィッグをつけ、バレない様にしている。

「よし！」
ウィッグを着け、改めて店の外に出ると外で待っていたお客さんの相手をしていたレイルに声をかけた。
「レイルー。エルさんが開店するって！」
レイルは、お客さんの相手を一旦やめ、私の方に来た。
「今日は何時もより早いんですね。」
そう言いながら、店の暖簾をかけた。
「たまにはね。皆様お待たせいたしました。ブルーム食堂開店です！」

１２年前…両親に先立たれ、泣きじゃくっていた私。
今ではすっかり、ブルーム食堂の看板娘をしています。

迫られる決断

「姫様、サリューシャの町では疫病が流行り始めています。今年からサリア国の増税も重なり、小さなデモがいくつか起きています。」
「サリア国の兵士たちが鎮圧しましたが、デモを起こした民に対する処遇が重く、更なる火種に結びつきそうです。」

夜。
人目を忍び、サリーナとレイルは町の南側の森にいた。
二人は5年前から森の小さな湖の畔にひっそりと建つ古い教会で、炎に燃えた城から逃げ延びた兵士や宮仕えの者達を密かに集め、各領地の情報と対応策を練っていた。
それは、隣国サリア国の襲撃を受け、敗れた後この国はサリア国の属国となった。
王族唯一の生き残りサリーナが行方知れずのため、当然の様にサリア国が政権を執る事となった。以前は堅王と知られていたサリア国王シャール。
何故彼の王がブロッサムローズ国を手中に納めたかったのかは謎だか、彼の王ならばきっと民を…憎い相手であったが、そう願った。
　しかし、シャール王は民に重税を課し、払わなければ良くて鞭打ち・最悪の場合は死罪にもなった。
またブロッサムローズ国王に使えていた者達を執拗に探し、姫の行方を探していた。
そのため、サリーナは名前を“サナ”と偽り髪も変えていたのだ。
そんな事が12年も続き、民衆の怒りが小さな反乱の火種になっていた。

「姫様。今はまだ小さな反乱で済んでいますが、このままでは…」
「反乱の殆んどが、戦を知らない民衆です。どう考えても結果は歴

然。」
「民をまた戦火に巻き込みたくない。そのお気持ちは、我らとて同じ！しかし、今立ち上がらねばこのブロッサムローズ国の民衆が死んでしまいます。」
「「「どうか、ご決断を！！」」」

「お前達の気持ちは分かった。しかし、決起するにも其なりの準備が必要だ。サリーナ様の気持も有る。もう少し様子を見よう。そうだな次の満月の夜まで…。それでよろしいですね。」今まで沈黙していたレイルがサリーナを助けるように口を開いた。
ブロッサムローズ国近衛兵団団長を勤めたレイルの言葉に彼らは、仕方無しにうなずいた。

集まった者達は、自身達が住む町へ帰っていった。
残されたレイルとサリーナのみ。
サリーナは、月明かりを浴びた十字架の前に立ち祈っている。
「サリーナ様…まだ１６の貴女に辛い決断を迫っているのはきっと彼らとて「分かってる！！分かっているわ。ありがとう、レイル。私なら大丈夫です。もう少し一人で考えたいの…だから先に戻って」

一人になったサリーナは、教会の隣にある小さな湖に佇んでいた。
湖の水面に映った、優しく光る月と星が揺ぎを見つめた。
（お父様、お母様…私はどうしたらいいのでしょう…）
何時も隠し持っている桜色薔薇石を握りしめ、祈るように口づけていた。

悩み（前書き）

短いです

悩み

はぁ。っと大きくため息をつくサリーナ。
ーこのままじゃ、この国はほろんでしまう。でも！反乱を起こせば、また血が流れる…どうしたら…
「おい、嬢ちゃん。あんまりぼーっとしてるとぶつかるぞ！」
背後から掛かった声にサリーナは、はっと意識を戻した。
意識を戻した先には、店の白い壁が…。
ほっと一息つくと、声の主の方へ振り向いた。
「フィルさん！私には、サナって立派な名前があります！何時までも子供扱いしないで下さい！」
振り返り、サリーナが叫んだ先には金髪の青年が店の壁に肩をつけ寄りかかりながら立っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5046k/

桜色薔薇

2010年10月9日05時02分発行